

ハプスブルグ家の唇

田 中 克 己

14歳になつたばかりのスペイン女王マルガレート・テレジアは、いつも鏡に向うたびに「受け口」ぎみのかわいらしい口をつばめたり、開いたり、とがらせたりして念入りにしらべたあげくやつと心が落ちつくのだつた。それというのも、廣間の壁に掲げられたカルル1世のグロテスクな肖像畫に氣付いてからのことである。カルル1世といえば、ルーテルの宗教改革に對策を誤つたため新教徒にはよくいわれないけれども、ハプスブルグ家にとつては忘れられない中興の祖であつた。かれは母親からの遺領をもとにしてスペインを領土にし、イタリアやネーデルランド（今のベルギー地方）を併合した。マゼラン探險隊の派遣やアメリカ大陸の植民地開發もかれの時代のことである。有能だつた先祖の功績を、王女は知らないわけではなかつたが、それにしてもあの畫像はどうしたことだろう。

長い顔のまんなかは奇妙にひらべたい、というよりは、いくらか凹んでいるらしい。そのためか人一倍長い鼻はますます目立つし、兩方の眼はギョロリと飛びだして見える。下顎は思いきり突きでて、うまく閉ぢ合わなくなつた口もとを驚くほど厚い下唇が受けとめている。

マルガレートはまつたくがまんがでしなかつた。しかし氣をつけてみると、それはなにもカルル1世ばかりではなかつた。王城や寺院のあちこちに誇らしげに飾られた王族たちの畫像も、カルルの顔立ちに似ているのが少くない。カルルの息子で、今のフィリッピンに名前を残しているフィリップ2世は、まるで父親に生き寫しといつてよかつたし、その息子のドン・カルロス——父親の後妻を戀し、後に發狂して死に、シルレルの悲劇の主人公になつた——の肖像も程度の差こそあれ祖父のおもかげを宿している。そういえばマルガレート・テレジアの父フィリップ4世も同じような傾向の顔つきをしているし、母マリア・アンナの方は下唇は大して厚くないが、やはり出つばつていて上唇を蔽つている。

王女はいつまでも鏡を見つめていると、そこに寫つている自分の顔に兩親の姿が重ね焼きされ、それがおしまいにはカルル1世の肖像そのままに變つてしまうような氣がしてくるのだつた。かの女の心配に感づいて、老女の1入が、唇の手入を怠らなければ大てい大丈夫だからと慰めてくれた。そういえば、眠るとき口を少し開けているせいか、目が覺めてみるとよく唇が乾いてかさかさになつていることがあつたが、侍女が香のよい油を薄く塗ってくれる理由を王女はそれまで知らなかつたのである。カルル1世のようにひどく下顎が出ていては口は閉まらないし、唇はいつも荒れて、ときどきは血がにじむこともある。もしかしたら、唇はそのために腫れあがつたのかもしれない。マルガレート王女は考えただけでおじけを震つて、滑かな唇にそつと香油を滴らしてみるのであつた。

この1族に傳わる奇形的な容貌はもちろんカルル1世に始まつたわけではない。傳記遺傳學者はそれより4代前にさかのぼつて、エルンスト鐵王の肖像にいわゆる「ハプスブルグ家の容貌」の原形を確めている。つづいてフリードリヒ3世、マキシミリアン1世、さらに1代とんでカルル1世（神聖ローマ皇帝カルル5世）とフェルディナンド1世の兄弟など代々の皇帝はいずれも下顎がひどく突出していたし、兼ねて垂れ下るような唇の持主も多い。カルル1世の子孫スペイン王家と、フェルディナンド1世につづくオーストリー・ハプスブルグとの間に交わされた濃厚な血族結婚がますます特徴の發現を助けたことは否定できない。

血族結婚といへばマルガレート・テレジアは叔姪結婚によつて生れた子である。母のマリア・アンナは15歳のときに、親子ほども年齢のちがうフィリップ4世の後妻としてオーストリーからとつてきた。王女が生れると間もなく、母の弟すなわち叔父にあたるレオポルドの嫁になるにちがいないという噂がもう宮廷内に擴がつていた。噂が正式の決定

になつて發表されたのは、かの女の12歳の時で、15歳の秋には婚禮がすんでしまつた。

後世發行された6ヘラー切手の肖像からもわかるとあり、レオポルド1世もやはり典型的な「ハプスブルグ家の唇」の所有者であつたが、かの女はもう驚きはしなかつた。氣のやさしい静かな女らしい性格で夫を愛した。レオポルドは外に出れば、トルコの侵入とフランスの攻撃に對して自ら出陣する勇敢な武將であつたが、また一方では文學、史學、天文學に通じ、4カ國語を自由に話し、ワルツの都の主

にふさわしく樂器を演奏して妻や妹たちと楽しむ人であつた。かれと年若い妻——それは決して美人ではなかつたが——はお互いにこの上なく幸福であつた。

しかしかの女のきやしやな體質は結婚生活に長くは堪え得なかつた。つづけて年兒を生んで5回目の子を身ごもつたまま21歳の若さではなくなつてしまつた。4人の子供はどれも悉く弱かつた。たび重なる血族結婚の害毒がこのときになつて表面に現われ始めたのであるうか。

家系圖を見よう。あたりまえなら6代前の祖先は64人いるはずであるのに、この子供たちにはただの2人を數えるにすぎない。この間に行われた19組の結婚のうち、4組の叔姪結婚と6組のいとこ結婚を含めてほとんど全部が近い近親間のものであつた。これは三十年戰役に引つづく歐洲の動亂に、いつも同盟を結んできたスペインとオーストリーの一家のような結合を確保するためとられた方針だつたのである。が、マルガレート・テレジアが生んだ子供のうち3人は生後間もなく亡くなり、ただ1人生残つた王女マリア・アントニアは、いとこ半にあたるエマヌエルと結婚

したが最初の子を産みおとした直後、まだ20歳の若さでこの世を去つた。遺子のジョセフ・フェルディナンドはスペインのカルル2世の後嗣に定められていたが、これまたこの世に8年の生を受けたにすぎない。

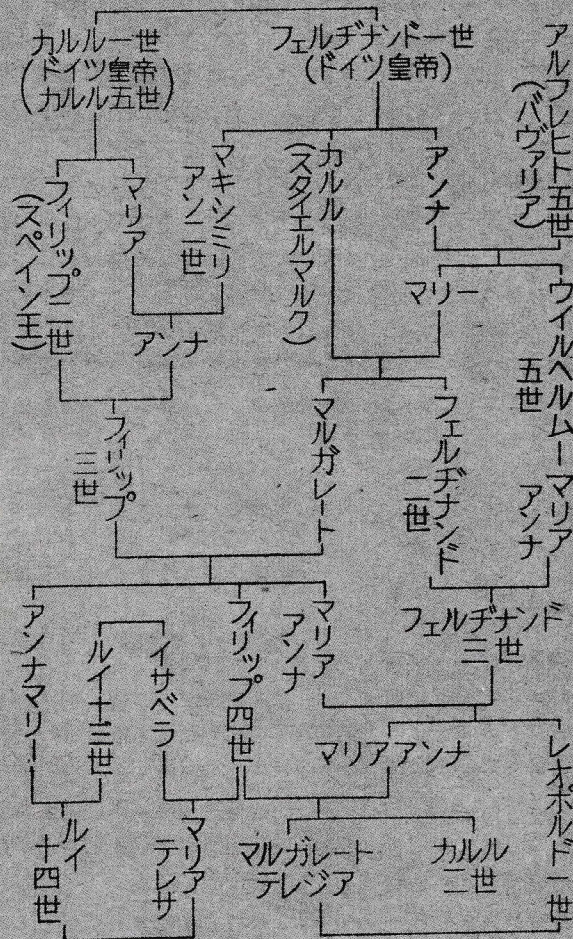
カルル2世——マルガレート・テレジアの弟で、フィリップ4世にただ1人残された男兒——はスペイン・ハプスブルグの期待に反して、姉より以上に虚弱でとても育つまいと何度か噂されたものである。かれの印象をオールノイ伯爵夫人は「旅行記」

の中でつぎのように記した。「顔は青白く、額が廣く、目は青くてやさしかつた。幅の狭い顔の中央に弓なりの鼻がのさばり、大きな口のもとに厚いハプスブルグの唇が人目を引いていた」と。下劑と瀉血を濫用する當時の不合理的な治療法に悩まねながらも、かれはどうやら成人して39歳まで生きのびた。しかしとても野心に燃える太陽王ルイ14世に對抗できるはずはなく、フランスの攻勢はもつぱら義兄のレオポルドが引受けることになつた。こうしてカルルの生前からすでにスペイン領を舞臺とする中歐の制覇はフランスとオーストリーとの間に争われていたのである。

フランスとの外交關係の悪化が原因で、カルル2世の最初の王妃ブルボ

ンのマリア・ルイゼは毒殺され、つづいて2度目の妻を南ドイツのノイブルグ伯家から迎えたが、再度の結婚に1人の子供も恵まれなかつた。姉のマルガレート・テレジアの子孫も全く絶えていたから、カルル2世の死とともにスペインの王統は絶えて、ここにスペイン繼承戰役が始まるのである。

戰に敗れて結局はスペインを失つたレオポルド1世の、後妻の子カルル6世も父に似て特徴のある顔



つきを肖像として残しているが、その娘マリア・テレサ以後、近代オーストリーの王室にはあの独特の唇が見られなくなつたようである。一方勝ち誇つたルイ 14 世は孫をスペインの王位につけてフィリップ 5 世としたが、新しい王朝にもハプスブルグ家の血が濃く混つている。ルイ 14 世の祖母メチチのマリイは血統の特徴を唇に現わしていたし、王の母も妃も、息子の妻もみなハプスブルグの出である。オーストリーの王室から姿を消した厚い唇は、皮肉にもスペインのブルボン王家に長く残された。すなわちフィリップ 5 世の後嗣カルル 3 世がそれであり、その子のカルル 4 世や孫たちは下顎突出の證據を肖像畫に残している。さらに 2 代とんで最後の皇帝アルフォンソ 13 世の特徴ある唇をスペインの郵便切手に注意した人も少なくなからう。

オーストリー、スペインの兩宗家はもちろんのこと、英國のステュアート王朝、フランスのブルボン家、フロレンスのメチチ家、ドイツの諸侯伯などハプスブルグ家の血の連なるところ幾多の王侯に家系の印を残して來たこの比較的害の少い特徴は、國々

のどこかで今も乙女の心を悲しませているのではあるまいか。

追記：ハプスブルグ家の唇は古くから傳記遺傳學者によつて注意されて來た。わが國では駒井卓先生の「遺傳と家系」(北隆館)に詳しい。奇形の發端について昔から行われたのは、エルンスト鐵王の妃シムブルギスから出たという説であるが、ガリッパやヘッケルはかの女の容貌を腦下垂體機能亢進による末端肥大症に歸してあり、子孫に現われた特徴とは關係がないといつている。

カントロヴィッツら口腔外科醫の考證によると、奇形の本態は上顎臼齒の缺損であつて、下顎がそれだけ長すぎることになり、うまく口が閉まらないことから唇に慢性の炎症を起して二次的に肥大を來したという。本稿には新しい説に従つておいた。時代的背景は主としてアダルベルトの「スペイン・ハプスブルグの最後」によつた。

——九州大學醫部解剖學教室 醫博——

問 哺乳動物の排卵はいつ行われますか

(小樽市緑丘 小林 京三)

答 哺乳動物の性的活動には一定の周期性がありますが、この性周期の間に發情が起り、排卵が行われて交尾・受精となります。哺乳類における排卵に關して詳細なことは、まだ十分に明かにされたとは言われません。

排卵はもちろん性周期の期間内に行われるのでありますが、哺乳動物の中には、(1) 交尾が刺激となつて排卵が行われるものと、(2) 性周期のある時期に外部の刺激とは關係なく生理的な内的條件が原因となつて偶發的に排卵が起るものと二つの場合があります。

(1) の場合の動物として現在確なものはウサギ、ネコ、イタチなどがあります。その他の大部分の動物は(2)の場合に屬するのであります。

また最近の研究では交尾以外の人為的刺激(例えばホルモン、電流など)によつても排卵が起ることも明かにされています。

ウサギに關しては排卵と交尾は密接な關係があります。交尾の刺激なしには排卵を起すことはできないことが確められ、排卵は交尾後 9.5 時間から 10 時間目に行われると知られていました。しかし最近ではウサギにホルモン剤(腦下垂體前葉ホルモン剤プロラン、妊婦尿 10cc、硫酸銅の 10~15cc)注射によ

つて良結果を得ています。またウサギは電氣刺激によつても排卵を起します。30ボルト、50サイクルの交流を兎の頭部または腰部に 7 秒の間隔で 13 秒ずつ通電し、17~24 時間後に排卵させています。これは電氣刺激が腦下垂體前葉を刺激しホルモンの分泌を促し卵巣に作用して排卵を起したと考えられています。

ネコでは發情した雌猫の膈をガラス棒で刺激して 25 時間内に排卵させた實驗があります。

コウモリの類では、秋季に交尾が行われ、精子は雌の生殖器の中で冬眠生存していて、翌年卵巣が成熟して排卵され受精が行われるのです。

——北大理動 増田健治——

遺傳 2 月號(第 4 卷第 2 號) 正誤

頁	行	誤	正
グラフ	4	エウンド	エンドウ
本文	9	左下より 14 敵意	敵意
	12	15 意見に反している	意見を反映している
	左 19	スイス	イタリー
	48 左下より 16	1960	1950
	左下より 12	Biologg	Biology
本文	24	右より 12 そういう生命の素粒子という言葉をごんな風に使つたら(物理學者に…)	そういう生命の素粒子みたいなものが(素粒子という言葉をごんな風に使つたら物理學者に…)